

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 兼武 道子

ヒュー・ブレア (Hugh Blair) は 18 世紀後半に活躍したスコットランドの学者・説教者で、エディンバラ大学に創設された「修辞学・文芸学 (Rhetoric and Belles Lettres)」講座の初代教授職に就き、彼の研究の集大成ともいえるべき 2 巻本の『修辞学・文芸学講義 (Lectures on Rhetoric and Belles Lettres)』(1784) は 20 世紀初頭までに、縮約版を含めると、300 弱もの版を重ねるほどの人気、影響力があったが、英文学批評の方法意識の高まりとともに、散発的に言及されるだけの忘れられた存在となっており、単独の研究書は皆無に近いというのが現状である。

本論文はそうした歴史的な文脈を踏まえつつ、ブレアの修辞学理論が有する現代的意味を、とくに「書かれた声」という古典修辞学にとっての根本的な問題がブレアの修辞学においてどのように位置づけられているかを探ろうとしたものである。そこで著者が枠組みとして参照するのが、声と文字の問題をめぐる 20 世紀の代表的な思索であるデリダのグラマトロジーである。主としてデリダの「プラトンのパルマケイアー」をプラトンの『パイドロス』と、また『グラマトロジーについて』をルソーの『言語起源論』と丹念に照らし合わせることによって、それぞれのテキストの読解としてのデリダ論考の有効性を検証しつつ、声と文字の問題についてのデリダの知見を援用することで、ブレアの修辞学理論の達成と問題点を明らかにし、18 世紀後半に英文学上の事件となった (贋作) 詩をめぐるブレアの批評論の実践である『オシアン詩批評 (A Critical Dissertation on the Poems of Ossian)』(1763) がいかに声と文字の融合という不可能を志向しているかを考察している。

プラトンの『パイドロス』に見られる書かれた声の問題を論じた第 1 章は、デリダが修辞学を歪曲している可能性を指摘し、「意味なき声」を重視する形而上学の系譜にブレアを位置づけるその議論に対して、ブレアが「連結語」という「意味なき声」をむしろ重視していた事実を実証的に提示して、初期デリダの見解とは異なり、修辞学が哲学と相補的關係にあった点を説得的に論じている。第 2 章では、こうしたブレアの言語論は必然的にプリミティヴィスト的な音声中心主義的色彩を帯びることになるが、その一方、リテラシーの向上を目指す「スコットランド啓蒙主義運動 (Scottish Enlightenment)」の理想を共有するために、書かれた言葉の音楽性の重視というブレアの立論が、書かれた声という修辞学上のパラドクスを露呈していることを、その著作の具体的な記述から明らかにする。第 3 章ではブレアに影響を与えた『言語起源論』に見られるプリミティヴィズムの特質を、そこにもっぱら音声中心主義を見出すデリダの読解を批判的に参照しながら、ルソーが声と文字の対立を乗り越える方途を模索していたという興味深い可能性が指摘される。第 4 章は、ルソー同様に声と文字の融合を志向したブレアが、ロンギノスの文体観とも呼応する形で、言語における「崇高 (sublime)」にプリミティヴィスト的価値を見出し、さらに『オシアン』の言語的崇高に、読者によって経験される声と文字の幸福な共存を見ていたことを丹念に跡付け、それこそが修辞学的パラドクスの反映であるとの的確に結論づけている。

これまで等閑視されてきた学者、文人についての極めて意欲的な論文であり、精緻を極めるテキスト読解と並はずれて流麗な英文は、国際的にも高い評価を得るものと考えられる。ブレアの修辞学理論と当時のスコットランド文化状況との、或いは読者反応理論との関係など、さらなる研究の余地が残されてはいるが、それはこの論文がヒュー・ブレアの現代的意味という研究の新地平を切り拓いたことを証明しているとも言える。よって審査委員会は全員一致で、本論文が博士 (文学) の学位を授与するにふさわしいものと判断する。